

～作品タイトル～

『少年野球と父』

～元にした作品のタイトル～

『父』芥川龍之介

～著者名～

太田 純平

～あらすじ～

少年野球チームの僕が今日もグラウンドにやって来ると、ショートの福德が監督やコーチに悪意のあるあだ名をつけ笑いを取っていた。そんな折、グラウンドの外から練習を覗いている怪しげな男が現れる。福德はその怪しげな男にもあだ名をつけろと要求されるが、その男こそ福德の実の父親であった。

～特記事項～

人の悪口を言って笑いをとる友人が、ひよんなことから、自分の父親を馬鹿にしなくてはならない状況に追い込まれてしまう。芥川龍之介の「父」はそんな物語ですが、イジメや誹謗中傷の問題が取り沙汰される昨今だからこそ、今一度フィーチャーされるべき作品なのかと思い、題材に選びました。

～本編文字数～

3599文字

外資系の油脂工場の正門を抜けると、敷地の中心地に大きなグラウンドがあった。僕たち少年野球チームは月に二度ほどそのグラウンドを借りて練習に励んでいる。駐車場では、他の小学校からの合流組である大内親子が、車からバットや給水タンクを和やかな雰囲気ですろしている。僕はそれを横目に見ながら、野球カバンを肩に掛け直すと、一人グラウンドに入っていった。

朝の7時前。レギュラー陣はすでにホームベースの辺りにだらだらと集まっている。荷物を置いた僕はなんとなくその輪の端っこに加わった。彼らの今朝の議題は「監督にあだ名をつけるとしたら？」だったようで、中心人物であるショートの福德が「クラゲ」と答えた。多分、監督の髪型を揶揄したのだろう。無精で伸びた襟足の白髪がクラゲの触手に見えなくもない。頭のとっぺんは丸みを帯びていてパカッと開きそうでもある。

彼の答えに満足をした小学5年生たちは、一斉に手を叩いて笑い合った。

「じゃあさ、じゃあさ、大内のお父さんは？」

レフトの杉本が駐車場のほうからやって来る大内親子を捉えて尋ねた。

「毒キノコ」

ここでも福德は満額回答で場を賑わせた。おそらく大内のお父さんの立派な鼻をキノコに例えたのだろう。そこに毒を添えて。

バックネットの裏では、うちの学校では感染症でイベントが中止になったのだ、PTAがどうだの、大人たちの社交場になっている。その傍らでピチツとしたスパッツを履いた藤田コーチが、アキレス腱を伸ばすようなストレッチを行っていた。細マッチョの身体のラインが浮かび上がっている。それを見ていたセカンドの多胡が福德に訊いた。

「じゃあ藤田コーチは？」

「隠し球」

ちょうど上体を後ろに逸らして下半身が強調されている藤田コーチを見て、僕らは大いに笑った。いや、厳密には、僕だけは心の底から笑ってはいなかった。ただ周りの同級生に合わせるように顔を作りながらも、本当は早く今日が終わらないかなあと、ずっと胸の内は苦しかった。

内野の守備練習が始まった。ピッチャー、キャッチャー、ファースト以外のメンバーが三塁に集まり、三遊間に打たれたボールを取って、一塁に送球する。ノックをしているのは藤田コーチだ。紺色の半袖シャツに真っ白いズボンのユニフォームを着た少年たちが、快音を響かせる白球を追って、きびきびと走り回っている。日焼けした顔に、残暑厳しい秋口の太陽光が当たって眩しい。

レギュラー陣に向けた強いノックの球に続いて、補欠の僕には明らかに手加減をした打球が転がされた。それでも「前マエまえーッ！！」とプレッシャーをかけられながら捕球するものだから、結果ポロリとエラーをする。その焦って取れなかったボールを追いかけてながら、自分はここに恥を掻きに来たのかと気持ちが萎えて、一塁に送球するボールも力が無かった。

もう自分の番は回ってくるなと思いつつながらノック待ちの列に戻ると、グラウンドの外に怪しいおじさんがいるとちょっとした騒ぎになっていた。三塁から見てちょうど一塁の奥のほう。ネットの外からこちらを眺めている。関係者はバックネット裏に集まっているし、休日出勤の工場の社員であれば、あんな上下グレーのジャージを着ているわけがない。風体はまるで朝まで呑んでいた酔っ払いである。

「福德」

笑いの好機とばかりに多胡が福德の名前を呼んだ。

「あの変な人にあだ名をつけるとしたら？」

もう周りは笑う覚悟は出来ています、というようなニヤついた顔だ。しかし僕だけはどこかあのおじさんに親しみを覚えていた。

「——あっ」

気づいて思わず声が漏れた。あれは福德のお父さんだ。福德の家に泊まりで遊びに行った時に挨拶をしたことがある。仕事が忙しいらしく、夜中に家に帰って来てもまた早朝にはいなくなってしまうらしい。

「あれは、ねえ」

ここまで歯切れよく答えてきた福德が少し悩んだ。といっても時間にすれば1秒か2秒くらいの間だった。きっと自分の父親だと気づいたのだろう。いや、もっと前から気づいていたのかもしれない。

「あれは、てるてる坊主」

坊主頭に濃い眉毛のおじさん。もともと吹き出す気でいた小学生たちは、案の定、爆笑した。

「明日はきっと晴れるよ」

珍しく福德が解説を入れる。すると他の連中も「あれは人間じゃなくて化け物じゃないか?」「最初は人間だったけど、お酒の飲み過ぎで死んでオバケになったんだ」「ハゲー!」「ジジイ!」などと好き放題言って盛り上がり始めた。

だけど僕だけは知っている。中身は感じの良いおじさんだ。僕が夜中に福德と野球のテレビゲームをやっていたら、うるさいと怒鳴るところか、一回だけ打たせてくれと一緒に遊んでくれたことがある。あと何時間かしたらまた仕事に行かなきゃいけないのに。

あのおじさんに悪口が飛んでいく度に僕の顔に麻酔がかかった。僕はどこも見る事が出来なかった。福德も、福德のお父さんも、練習も。僕だけが宙に浮いていた。

打席に入った僕は追い込まれていた。ワンボール、ツーストライク。強打者ではない僕にもう一球ボール球を放るほどエースの上坂は慎重な男ではない。それが分かっていたとしても、彼の投げる重いど真ん中のストレートがどうしても打てなかった。三振、バッターアウト。9番ライトの僕が凡退すると、1番の福德に打順が回ってきた。いかに下手くそな僕でも紅白戦ではどちらかのチームに入らないと人数が足りない。僕のチームは多胡、福德の二遊間コンビや、打率の高いレフトの杉本などがメンバーだったが、野球の申し子である上坂の球が打てず、6対0で負けていた。

ツーアウト、ランナーなし。先程の打席ではゴロに打ち取られている福德にはとにかく出塁が期待されていた。ベンチの僕たちの応援にも気合が入る。と、その時だった。

「タカシー！ ガンバレー！」

放たれた怒号のような声援。タカシというのは福德のことだ。声の主は彼のお父さん。つまり——てるてる坊主だ。

この叫び声にはファーストのみならず全ての守備陣がびっくりして顔を向けていた。え、あれって、福德のお父さんだったの、という視線がそこかしこで交差する。とうの福德はバットを構えたまま動かなかった。

気を取り直した上坂が投球モーションに入る。福德は軽打が得意で滅多に三振をしない。が、妙な力みが入ったのだろう。彼のバットが空を切った。スリーアウトチェンジ。

「なんだ、タカシのお父さんか。入ってもらえよ」

ベンチに下がる福德に監督が気を遣って声を掛けた。もごもごしている福德の答えを聞くよりも先に藤田コーチが呼びにいった。息子に呼ばれたのであれば遠慮することも出来ただろうが、日頃お世話になっているコーチに呼ばれたとあっては断りづらかったのだろう。福德のお父さんはペコペコ頭を下げながらバックネット裏のほうへやって来た。

そしらぬ顔でグラブを持って守備につこうとする福德を監督が呼びつけた。日頃から息子がお世話になっております、いえいえこちらこそ、という大人たちの挨拶が交わされる。僕はライトの守備位置に向かう前にそれを見ていた。

「まったく仕事だって言ってたのに」

やっと大人たちから解放されたと福德が戻って来ると僕に愚痴をこぼした。

「いいじゃん来てくれるだけ」

「いいんだよ来なくて」

ぶつくさ言いながらもショートに向かっていく福德の足取りはどこか軽快である。二塁の辺りで多胡に引き止められて白い歯も見せている。親が見に来て嬉しくない小学生はいない。

「なんだお前、あれが福德の父さんだって知ってたの？」

ライトへ向かう途中の僕に多胡が訊いた。苦い顔で「いやあ」と誤魔化すような態度をとる。

「そういやお前の父さんは？ 見たことねえけど」

そう多胡が言い放つなり、聞いていた福德が「バカ、こいつのお父さんは、去年——」と慌てたように質問に蓋をしてくれた。福德とは同じ小学校でクラスまで一緒だったから葬式にも出てもらった。

ムードメーカーと嫌なやつ境界線にいる多胡といえども一瞬で具合が悪そうな顔になって、「そうなんだ」と一言で会話を終わらせると、ファーストと試合再開前のキャッチボールを始めた。

僕は彼らと別れてライトの守備位置についた。誕生日プレゼントに左利き用のグローブを新調してくれた父。腰痛持ちなのに僕と公園でキャッチボールをしてくれた父。スタジアムへ野球観戦に行ってホットドッグを買ってくれた父。そんな父はもういない。だけど別に羨ましくなんかないさ。別に羨ましくなんか――。

僕は右手にはめたグローブを叩いた。ド下手で苦しくても僕が野球を続けている理由はこれだ。試合が再開される。負けているゲームを盛り立てようと、僕は天に向かって大声で叫んだ。

「しまっていこーぜー！」